

○田野敬子 村主由紀 宮田義昭

(ノートルダム清心女大 人間生活)

【目的】女子大生の咀嚼機能の現状を咀嚼能力および最大咬合力(以下咬合力)の面から把握し, これらと身体状況, 運動能力および咀嚼機能の背景となると考えられる食事態度との関連の有無について検討した。

【方法】本学の「基礎体育」を受講中の, 咀嚼機能に異常がない学生 206 名を対象とした。調査内容は①咀嚼能力(チューインガム法), ②咬合力(オクルーザルフォースメータ GM10), ③身体状況(身長, 体重, 体脂肪率, BMI), ④運動能力(握力, 上体起こし, 長座体前屈, 反復横飛び, 20m シャトルラン, 立ち幅とび, 背筋力), ⑤食事態度(食事の際の水, お茶, 汁物等による流し込み習慣の有無, 食べる速さに関する自意識等)で, 咀嚼能力・咬合力を標準偏差の前後でそれぞれ低群と高群に分け, 上記各項目との関連の有無を評価した。

【結果】咀嚼能力, 咬合力, 身長, 体重, 体脂肪率, BMI の平均値±標準偏差はそれぞれ $0.80 \pm 0.13\text{g}$, $49.8 \pm 18.2\text{kg}$, $158.1 \pm 5.0\text{cm}$, $51.2 \pm 7.0\text{kg}$, $25.3 \pm 5.3\%$, $20.5 \pm 2.5\text{kg/m}^2$ であった。咀嚼能力と身体状況, 運動能力および食事態度との間にはいずれも有意な関連, あるいは明確な因果関係は認められなかった。咬合力と身体状況の間には高群が低群に比べて体重(kg): 49.9 ± 6.6 (低群), 53.5 ± 7.4 (高群), BMI(kg/m^2): 19.9 ± 2.0 (低群), 21.3 ± 2.5 (高群)ともに有意に高値であった($p < 0.05$)。運動能力との関連では高群が低群より握力(kg): 25.6 ± 3.6 (低群), 28.0 ± 4.5 (高群), 背筋力(kg): 65.7 ± 19.0 (低群), 76.9 ± 18.9 (高群)ともに有意に高く($p < 0.05$), 立ち幅とびとの間には高群が高値である傾向が認められた。食事態度との間には明確な関連は認められなかった。また, 咀嚼能力と咬合力の間には有意な関連は認められなかった。